

鎌倉の海から

永山 誠

*外国人観光客でにぎわう鎌倉

材木座海岸は何度も歩いている。富岡八幡宮の背後にあるこの海岸はJR鎌倉駅から近いので、できるだけ寄ろうと思ってきた。とくに春の波はおだやかで、キラキラキラと光を反射させながら砂浜にゆったりと寄せ、ザザザと崩れて走りながら砂のなかにもぐりこんでいく。私の時間も砂の中に消えていく。

材木座海岸近くの小高い山にある安国寺であったろうか、戦後、鎌倉に文部省の認可をえない「鎌倉アカデミア」という大学がつけられた。哲学者・三枝博人が初代学長である。戦前の自由と民主主義の抑圧を許してしまった反省に立つ大学教育をめざした。しかし直接的には財政難のため短期間で閉校する。「鎌倉アカデミア」はなぜ行き詰まったか、どうすればよかったのか、30歳代に入ったころだろうか私は東京都立大学総長だった沼田稲次郎先生にお会いするたびに何度か教えを乞うた。なぜかこだわっていた。

鎌倉の地は源頼朝が1192年、鎌倉幕府を置いたところである。幕府は京の王朝＝藤原政権に抵抗する河内源氏と桓武平氏が連合する「武士の権力」である。鎌倉という土地は歴史的にみると、権力に対する反骨の気風があるように思う。何がこのような風土を生み出すのか私にはよくわからない。

JR鎌倉駅を降り富岡八幡宮に向かって小町通りを歩くとひどい人混みで、過日の落ちついた雰囲気はない。鎌倉の観光客は京都などに次いで多いともいう。とくに外国人観光客が増えているのだが、この人たちはいったい鎌倉で何を見、何を感じ取っているのだろうか。

*鎌倉の海・明治20年ごろ

1884（明治17）ごろからしばしば来日したアメリカ人にライザ・シッドモアという女性がいる。

彼女は「日本で貧者というと、ずいぶん貧しい方なのだが、どの文明人を見回しても、これほどわずかな収入で、かなりの生活的安楽を手にする国民はない」と日本の貧者について書いている。「木綿着数枚で春と秋、夏、冬と間に合ってしまう」。そして「労働者の住、居、寝の三要件」は「草ぶき屋根、畳、それに木綿ぶとん数枚」で満たされていると。シッドモアは、他の国と同様、日本も大きな貧富の差があるが、貧者については以上のように理解したのである。収入の格差にもかかわらず、日本人はみな「このうえない清潔」な暮らしをしており、生活環境もきわめて清潔に保ち、生活的安楽をえているという。

シッドモアは鎌倉の海岸にも足を運び、次のような光景をみる。

「日の輝く春の朝、大人は男も女も、子供らまで加わって海藻を採取し、砂浜に広げ

て干す。・・・漁師のむすめたちが脛を丸出しにして浜辺を歩き回る。藍色の木綿の布切れをあねさんかぶりにし、背中に籠をしょっている。子供らは泡立つ白波に立ち向かったりして戯れ、幼児は砂の上で楽しそうにころげ回る。男や少年たちは膝まで水につかり、あちこちと浅瀬を歩き、砕け散る波頭で一日中ずぶぬれだ。・・・婦人たちは海草の山を選別したり、ぬれねずみになったご亭主に時々、御馳走を差し入れる。温かいお茶とご飯。そしておかずは細かにむした魚である。こうした光景すべてが陽気で美しい。だれもかれも心浮き浮きうれしそうだ。だから鎌倉の生活は、歓喜と豊潤から成り立っているかのように見え、暗い面などどこ吹く風といった様子だ」(シッドモア『日本・人力車旅情』有隣堂 1986. 60 頁)。

鎌倉海岸で暮らす人びとの生活の情景は、アメリカ人シッドモアの目を通すと、生活的安楽、陽気、浮き浮き、歓喜、豊潤、暗い面などどこ吹く風・・・というキーワードになる。

シッドモアが日本に来ていた時期とほぼ同じころ、英国公使 H.フレイザーの妻メアリー (Mary Fraser 1851-1922) もまた 1890 (明治 23) 年の鎌倉の海をみている。これは地引網漁の様子だと思うが、次のような光景である。

「美しい眺めです。—青色の綿布をよじって腰にまきつけた褐色の男たちが海中に立ち、銀色の魚がいっぱい踊る網をのぼしている。その後ろに夕日の海が、前には暮れなずむビロードの砂浜があるのです。さてこれからが、子供たちの収穫の時です。そして子供ばかりでなく、漁に出る男のいない後家も、息子をなくした老人たちも、漁師たちのまわりに集まり、彼らがくれるものを入れる小さな鉢や籠をさしだすのです。そして食用にふさわしくとも市場に出すほど良くない魚はすべて、この人たちの手に渡るのです。・・・物乞いの人にたいしてけっしてひどい言葉が言われぬことは、みていて (気もち：永山) 良いものです。そしてその物乞いたちも、砂丘の灰色の雑草のごとく貧しいとはいえ、絶望や汚穢や不幸の様相はないのです」(『英国公使の見た明治日本』淡交社 1988 181 頁)。

イメージとしてはシッドモアと共通している。ただメアリーの場合は、漁師たちから魚を受け取る人びとが「男のいない後家」「息子をなくした老人たち」「物乞い」など個々の人びとの家庭環境を承知したうえで観察している。そして「市場に出すほどよくない魚」という表現からも推察されるように、この人びとの日常を継続的に観察していることがわかる。そのうえで「物乞いたちも・・・貧しいとはいえ、絶望、汚穢、不幸という言葉とは無縁」だという。

観察が一時ではなく、分析的で継続的である。漁師の暮らしぶりから地域コミュニティの状況を読み取っている。

シッドモアにせよメアリーにせよ二人は共通に、鎌倉人の生活は貧乏な人をふくめ、絶望、汚穢、不幸とは無縁で、むしろ、生活的安楽、陽気、浮き浮き、歓喜、豊潤というキーワードで理解した。「暗い面などどこ吹く風」ということである。

* 貧困 (poor) と貧乏

貧困 (poor) と貧乏ということばがあるが、私たちはだいたい同じ意味でつかっている。所得が少ないと直感的に「貧困」と判定する。だからたいがい給与は人に知られたくない。逆に平均的な給与の場合、「私は中流」と無意識のうちに思い込む。

1960—70年代の高度経済成長期は「春闘」という言葉が日常的に使われた。春季の賃金引き上げは会社側と労働組合側の代表による交渉で決まるので「自分の賃金＝自分の能力」と考えることはあまりなかった。しかし今は、能力主義だの成果賃金だのいいますが、簡単にいえば賃金は企業査定で決まるので、自動的に賃金は「自分の能力」だとこれを受容する。だから貧乏は能力の低さを意味する。教育を受けた人はこれを「自己責任」ということばで意識する。

シッドモアやメアリーの目でみると「貧乏＝能力の低さ」＝「自己責任」説は、社会が作り出した「幻想」であることがわかる。鎌倉の海岸に住む人は、たとえ貧乏であろうと「暗い面などどこ吹く風」で、絶望、汚穢、不幸とは無縁だという。それだけではなく貧乏なのに日常の生活は陽気、浮き浮き、歓喜、豊潤だという。これはいったいどういうことなのか？ 貧困 (poor) と貧乏とを区別して考えている。

シッドモアにせよ、メアリーにせよ、英語圏の女性である。貧困は poor と理解する。poor を英和辞典で用例をみるとおおむね以下のように整理できる。

「poor」の意味は？

- ① 貧乏、不足している
・・・生活費等の不足
- ② 劣っている、欠陥がある、お粗末、下手くそ、訓練されていない、不得意な、貧弱
・・・仕事、生産、技術、教育、生活管理で一般の人より作業等のやり方がうまくないこと。
- ③ 虚弱な、不健康な、気力がない
・・・体力が弱く不健康で、気力が低いこと。
- ④ かわいそう、不幸な、不運な、気の毒な
・・・不幸、不運
- ⑤ 道徳観念が乏しい、卑劣な、下劣な
・・・「人間の尊厳」を踏みにじること、アンフェアな行為、反道徳的で人間に値しない状態

つまり貧乏という言葉は、貧困 (poor) の一部の要素でしかない。だから貧乏であっても貧困には当たらない場合がでてくる。英和辞典の用例はこれをよく示している。しかし高度経済成長期を経た 1980 年代以降、日本で貧乏は、多様なルートを通じ貧困 (poor) を生み出す太いパイプと化した。貧乏の真の恐ろしさは実はこの点にある。

「貧乏＝能力の低さ」＝「自己責任」意識は貧困と貧乏との同一視が土台になっている。課題はこの知的面での poor の社会的克服である。現実でも貧乏の原因を個人の問題にし、

放置することには限度がある。個人、企業、政府・行政それぞれは何がやれるか課題であるが、これは直接的には福祉の問題である。

英語圏のイギリスの場合、ベバリッジ計画（1942）がつくられた。この計画によれば、社会保障・社会福祉が克服対象とする政策課題は「5つの巨悪」である。

「生活困難」を生み出す「5つの巨悪（人）」とは？

- ① 貧窮 (want)・・・必需品、必要、欲望、欲求、欠乏、困窮、貧困
- ② 疾病 (disease)・・・病気、精神や道徳などの不健全さ病弊
- ③ 無知 (ignorance)・・・無学、無知
- ④ 不潔 (squalor)・・・汚らしいこと、不潔、みじめ、墮落、卑劣、卑しさ
- ⑥ 怠惰 (idleness)・・・暇なこと、怠惰、無用、無益、根拠のないこと

ベバリッジ報告の「5つの巨悪」は Poor の用例とほぼ重なっている。つまりベバリッジ報告は基本的にいって poor に対する国家の総合対策といえる。国家による総合的貧困(poor)対策である。総合的貧困対策は個人や企業では不可能で、社会的対策とりわけ国家の対策が決め手である。

ともあれ、おもしろいことはシッドモアもメアリーも poor という尺度で鎌倉の海の光景を観察した。当たり前といえば当たり前である。私からみれば二人の女性のこの目線は真正正銘の＜福祉の視点＞である。

* 鎌倉の海と 21 世紀の福祉社会

19 世紀鎌倉の海には、二人の女性が印したように貧乏であっても＜絶望、汚穢、不幸＞とは無縁であり、＜生活的安楽、陽気、浮き浮き、歓喜、豊潤＞な日常があった。21 世紀の福祉を考える場合、キーワードは 19 世紀鎌倉の海にある。私たちの＜21 世紀福祉ビジョン＞は日本の歴史にヒントがある。横文字を並べる学者や政府のビジョンを待つのではなく、国民のコミュニティが求める要望・希望を、生活の「語りことば」で表現し、国民の福祉モデルとすることが必要である。国民が主権者としての責任において構想する福祉ビジョンである。暮らしの歴史に根をもつ福祉構想こそが 21 世紀日本版のベバリッジ報告となる。

鎌倉の海は 2020 年、東京オリンピックでヨットレース会場になる。さらに外国人でいっぱいになる。

(2018.12.10)